

『大唐三蔵取経詩話』の俗字「虫」について

浦山 あゆみ

はじめに

『大唐三蔵取経詩話』（以下『取経詩話』と略称する）は、日本にのみ残った孤本である。玄奘の天竺取経の旅を描いた小説で、史実から物語へ展開した頃の初期の姿と考えられ、およそ宋時代に成立したものとされる¹⁾。玄奘の旅行話は次第に豊かに脚色されて雑劇等へ発展しながら、明代の章回小説『西遊記』に至って大きく開花したので、西遊記物語の変遷を研究する上でも『取経詩話』は重要な位置にある。

どのような文学作品を研究するにしても、校勘は欠かせないが、『取経詩話』のテクストクリティックを行っているうちに、「虫」という文字をめぐる問題に気づい

たので、本稿において指摘しておく。なお、文字の異同が重要となるため、原本影印の『大倉文化財団 宋版大唐三蔵取経詩話』を底本とし（以下、底本²⁾）、『新彫大唐三蔵法師取経記』（以下、大字本³⁾）、『近代漢語語法資料彙編・宋代卷』所収の「大唐三蔵取経詩話」、『大唐三蔵取経詩話校注』（以下、校注本⁵⁾）を参照した。

一 第四に見える「兔」について

問題提起としてまず『取経詩話』「入香山寺第四」を抜粋する。

【原文】

迤邐登程、遇一座山、名号香山。是千手千眼菩薩之地、又是文殊菩薩修行之所。峯頭見一寺額、号香山

之寺。法師与猴行者不免進上寺門歇息、見門下左右金剛。精神猛烈、氣象生穉、古兒楞層、威風凜冽。法師一見、遍鉢汗流、寒毛卓豎。猴行者曰「請我師入寺内巡賞一廻。」遂与行者同入殿内、寺中都无一人、只見古殿巍然、芳草連綿、清風颯颯。法師思惟、此中得恁寂寞。猴行者知師意思、乃云「我師莫訝西路寂寞。此中別是一天。前去路途、尽是虎狼蛇兎之處、逢人不語、万種恓惶。此去人煙、都是邪法。」法師聞語、冷笑低頭、看遍周回、相邀便出。

(底本十二〜十三頁。句読・傍線等は筆者による)

恣意性を排除するため、敢えて当該部分の太田辰夫訳を引用する。

【太田訳】

はるばる旅をかさねますうち、香山という山につきましました。そこは千年千眼菩薩のおわします山で、また文殊菩薩もここで修行されたところでござりまする。

ふり仰げば寺の額に「香山之寺」としてあります。法師と猴行者が山門をくぐって一息つこうとしますと、ふと入口の両側にある金剛が眼にとまりました。

その金剛、猛々しき精気にみちあふれ、顔貌ふるめかしく、威風凜々としております。法師は一目みるより、満身にゾツと冷汗を流し、身の毛がよだちました。

猴行者、

「法師さま、境内をひとめぐりいたしましょう」

そこで、ともに内にはいつてみますと、人つ子一人みあたりません。古めかしいお堂がそびえ立ち、香しい草が一面に生い茂り、清らかな風がそよそよと吹くばかり。

法師が、

—— なんととしてこのように寂しいところなのでろう。

—— と思っておりますと、行者はそれに気がつきまして、

「師匠、西天への路は寂しいどころの話ではござりませぬ。ここはこれでも別天地でございます。

この先にまいりますと、そこには虎・蛇・狼・兎などがいるばかりで、話をする人もなく、それはそれは寂しいところです。このさき人煙のあるところは、みな物怪ものまがのすみかでございます」

法師は冷やかに一笑し、だまつてうつむかれま
した。それからあたりを見廻りまして一行は出発と
なります。
(底本九十九頁十一頁。傍線は筆者)

特に着目したいのは下線部である。この「虎狼蛇兎
之処」は「そこには虎・蛇・狼・兎などがあるばかり」と
訳されているが、直後にあるようにこれらの動物は
「寂しいところ」の象徴であり、原文はそれをも含めて
「万種恟惶」と表現している。「万種」はあらゆるもの、
「恟」は寂しさ、「惶」は怖いことを意味する。つまり
「虎狼蛇兎之処」は猴行者が「恟惶」の程度を伝えるた
めに用いた換喩表現と考えられる。具体的動物を列挙す
ることで、今後の旅程で通る地域が、香山寺よりも更に
寂しくて怖い場所であることを説明するために使った表
現である。⁽⁶⁾

確かに虎・蛇・狼・兎は人里離れた荒野に出没するも
のである。また虎や狼は人を襲う可能性が高く、玄奘一
行にとつては当然怖い存在である。しかし、蛇と兎はど
うであろうか。寂しいところを代表する動物かもしれな
いが、恐れるほどではないのではないか。

次節では『取経詩話』における蛇と兎を見ていくこと

とする。

二 第四の「虫」字について

第四では前節で引用した箇所において、蛇が登場し、
具体的な様子が描かれている。

【原文】

前行百里、猴行者曰「我師前去地名蛇子国。」且見
大蛇小蛇、交雜无数、攘乱紛々。大蛇頭高丈六、小
蛇頭高八尺、怒眼如燈、張牙如劍、氣吐火光。法師
一見、退歩驚惶。猴行者曰「我師不用驚惶。国名蛇
子、有此衆蛇、虫大小差殊、且縁皆有佛性、逢人不
傷、見人不害。」法師曰「若然如此、皆頼小師威
力。」進歩前行。大小蛇兒見法師七人前来、其蛇尽
皆避路、閉目低頭、人過一无所傷。

(底本十四頁十五頁。句読・傍線等は筆者)

【太田訳】

百里ほどまいますると、猴行者の申すよう、
「師匠、これから蛇の国というところですよ」

見ればかぞえきれぬほどの大きささまざまの蛇が、
あたり一面にうごめいております。大きなのは頭ま
で一丈六尺、小さいので八尺で、眼は提灯のごとく、

牙は劍のごとく、口よりは火の光を吐いております。法師、見るより驚いてとびさがりました。猴行者の申すよう、

「驚かれるにはおよびませぬ。蛇の国なればこそこ
う多くの蛇がおりますが、大きいのも小さいのも
みな仏心をそなえておりますゆえ、人にかみつ
いたり、物をそこなうようなことはいたしません」

法師、

「そういうことであれば万事よろしく願いまする」

と申してさきへ進みます。

大小の蛇は、法師ら七人の近づくのを見るや、お
おの路をひらいて目をつむり、じっと首をたれ
ております。
(底本九十一〜九十二頁)

玄奘は多くの蛇がひしめき合う状況に遭遇し、しかも
その蛇がみな「怒眼如燈、張牙如劍、氣吐火光」である
ため、思わず「退歩驚惶」してしまふ。つまり、これら
の蛇は人を襲わなくとも、威嚇する容姿を備えている。
しかもそれがたくさん集まっていれば、玄奘を驚かせ怖
がらせるのに充分であろう。したがって、前半部におい
て猴行者が虎・狼と並ぶ「恟惶」の例として蛇を挙げた
のは偽りではなかったことにもなっている。実際には蛇

子国の蛇たちは「佛性」を備えており、すくなくとも玄
奘一行に対しては従順である。襲うどころか行く道を開
け、頭を下げて大人しくお見送りするので、危害を加え
る心配はないが、同じ第四の後半部分で蛇が登場するこ
とにより、猴行者が「前去路途、尽是虎狼虺兎之処」と
話した内容が実現するので、猴行者の言うことは信憑性
が高いと玄奘（しては読者）に信じさせる効果がある。

とここでここで気になるのが傍線部の「虫」字である。

太田訳が「虫」字をどのように判断しているかは明確で
はない。大字本では「虫」が「魚」（すなわち鱉）字にな
っており、また同じ第四の下線部「大蛇」「小蛇」「其
蛇」、さらに「過長坑大蛇嶺処第六」にも、

次入大虜領、目見大蛇如龍、亦无傷人之性。

(底本二十頁。句読、傍線は筆者)

とあるように「大蛇」という語が見える。蛇に「蛇」
「蛇」両方の表記がみられるものの、固有名詞（「地子
国」や「大蛇嶺」として用いられるのを除けば、動物の
蛇そのものを意味する場合は二文字で表現するのが『取
経詩話』の通例である。また「此衆」を指示代名詞複数
形として用いる例が『取経詩話』中には見えない。した
がって「有此衆蛇虫大小差殊」は「衆蛇」と考え、「虫」

は「虫」字の誤りと考える。⁽⁹⁾このように『取経詩話』の、特に「虫」字には注意が必要である。

三 第十の「虫」字について

一節で挙げた第四の「虎狼虵兎」と類似する例に、『取経詩話』第十の「虎狼虫獸」がある。

【原文】

僧行前去、沐浴殷勤、店舍稀疎、荒郊止宿。虫有虎狼虫獸、見人全不傷殘。

(底本三十八頁。句読は筆者)

【太田訳】

一行は、さきにまいりましたところで、ねんごろにゆあみをし、身をきよめました。

そのあたりは家らしい家もないままに荒野に野宿することにりました。虎・狼・虫の類はおりませんが、人を見てもなんの害もいたしません。

(底本一・二三頁)

このように「虎狼虫獸」を「虎・狼・虫の類」と訳出し、荒野に生きる代表的な三種の生物として列挙している。虫としてはサソリのような毒虫が想定されよう。いずれも人に危害を加える生物として挙げられているが、

前節で挙げた蛇同様、玄奘一行に対しては大人しい。つまり本来ならば恐ろしい生物が従順である様子を述べることにより、玄奘が特別な存在であることを強調する描写である。こうした類型、すなわち聖なる者に動物が感化される話は、仏教説話によく見られる。

上記の訳文から分かるように、太田氏は「虫」字は当用漢字の虫すなわち「蟲」の俗字と捉えている。『宋元以來俗字譜』(中央研究院歷史語言研究所一九三〇年)でも「虫」字を「蟲」の俗字としている(七十頁)。潘重規『敦煌俗字譜』(敦煌學文獻卷第二冊甘肅文化出版社一九九九年所収本を用いる)では『宋元以來俗字譜』を転載して多くを語らないが、「蟲」字には「蟲」を採り(二九一頁)、「虫」字を「虫」の俗字と見なしていることが看取される(二八八頁)。

「虫」字は『説文』によれば、

一名蝮、博三寸、首大如擘指。象其臥形。物之微細。或行或飛、或毛或鱗、或介或鱗。以虫爲象。凡虫之屬皆从虫。

(段玉裁『説文解字注』十三篇上。句読は筆者)

とあることから分かるように「一名蝮」、つまり毒蛇の一種である。段注では「今本虫作虺」「許偉切」(日本

漢字音ではキ)とし、「虺」(音キ)の古字である。

宋・郭忠恕撰の文字学書『佩觿』に、よく誤用される文字の例として、

蛇虫之虫爲蝨豸。

(序十二葉表)⁽¹⁰⁾

と挙げられていることから、すでに宋代には「虫(毒蛇)」が「蝨(毒虫)」と混同されていた。したがって『宋元以來俗字譜』が「虫」字を「蝨」の俗字とみなすのも、一概に誤りとは言いい切れず、『取経詩話』第十に見える「虎狼虫獸」の「虫」は「蝨(毒蛇)」あるいは「蝨(毒虫)」の二つの可能性がある。

四 兔と「虫」「虺」「蝨」について

本節では『取経詩話』第四「虎狼虺兔」の「兔」つまり兔の方を見ていく。兔は「虎・蛇・狼」と並ぶ有害生物としてのイメージがあるといえるのであるうか。『取経詩話』の他の箇所にも兔は出現しないが、上でも挙げた『敦煌俗字譜』(二八八頁)には「虫」字の俗字に「虫」(敦煌秘籍留真新編十八卷二十六頁の例)が収められており、書写の際に兔と混同されてもおかしくはない例もある。

そもそも兔が有害であるというイメージを、当時の『取経詩話』の読者が共有できるのかどうかを見るため

に、主として玄装に関わる文献(『大唐大慈恩寺三藏法師伝』(以下、『慈恩伝』)・『大唐西域記』・『統高僧伝』)・『釈玄装伝』)を中心にして、兔のイメージを見ていくこととする。『大唐西域記』第七に「狐兔猿」の故事が見える。

【原文】

烈士池西有三獸牽堵波、是如來修菩薩行時、燒身之處。劫初時於此林野、有狐兔猿、異類相悅。時天帝釋欲驗修菩薩行者、降靈應化爲一老夫、謂三獸曰「二三子善安隱乎、無驚懼耶。」曰「涉豐草遊茂林。」異類同歡、既安且樂。老夫曰「聞二三子、情厚意密、忘其老弊、故此遠尋。今正飢乏、何以饋食。」曰「幸少留此、我躬馳訪。」於是同心虛己、分路營求。狐沿水濱、銜一鮮鯉、猿於林樹、採異華菓、俱來至止同進老夫。唯兔空還、遊躍左右。老夫謂曰「以吾觀之、爾曹未和。猿狐同志、各能役心。唯兔空返、獨無相饋。以此言之、誠可知也。」兔聞譏議、謂狐猿曰「多聚樵蘇、方有所作。」狐猿競馳、銜草曳木、既已蘊崇、猛焰將熾。兔曰「仁者、我身卑劣、所求難遂、敢以微躬、充此一餐。」辭畢入火、尋即致死。是時老夫復帝釋身、除燼收骸、傷歎良久。謂狐猿曰「一何至此。吾感其心、不泯其迹。寄之月輪、

傳乎後世。」故彼感言、月中之兔、自斯而有、後人於此、建牽堵波。

(大正藏卷五十一 九〇七b。句讀等は筆者)

【和訳】

烈士池の西に三獣の卒塔婆があり、そこは如來が菩薩修行をしていた時に、身を焼いた場所である。この世の始め、この野山に狐・兎・猿の三獣が仲良く暮らしていた。天帝釈は菩薩修行をする者を試そうと老夫に化身し、三獣に言った「おまえたち安心せよ、驚かなくて良い。」そしてまた「野を駆け林に遊ぶが良い。」と。動物は喜び、安心して楽しんだ。老夫は「聞いてくれ、優しい者たちよ、私は老いたことも忘れ、こんなに遠くまで来てしまった。お腹が空いたので、何か食べ物をくれないか。」と。「少しお待ち下さい、取って参ります。」そう三獣は言う、それぞれ食物を探しに行った。狐は川辺に行き一匹の鯉を銜え、猿は林で珍しい果物を取ってきて、揃って老夫に差し出した。兎のみ宙返りしたり、あちこち飛び跳ねただけであった。老夫は言った「見たところおまえたちは一様ではない。猿と狐はそれぞれ心遣いがあったが、兎だけは飛び跳ねるの

みで何もなかった。このことからわかるであろう。」と。兎はこの言葉を聞いて、狐と猿に「たくさん薪を集めておくれ、やりたいことがあるから。」と言った。狐と猿は駆け回り、草木を加えて積み上げ、薪に火を点けた。兎は「私は卑しく、何も出来ませんので、この身を一食に捧げます。」言い終えると火の中へ飛び込み死んだ。老夫は帝釈の姿に戻り、亡骸を取めると永らく哀しんだ。そして狐と猿に言った「こんなことになるうとは。その心に感じ入り、兎のことを忘れまい。この亡骸を月に寄せ、後世に伝えよう。」と。これが月中の兎のお話で、後世の人がここに卒塔婆を建てたのである。

月兎の由来として日本でも有名な話である。ここに見える兎は無力だが純真な動物である。同じ『大唐西域記』の中には、卷二に「兎毫」(大正藏卷五十一 八七五c)・卷二に迦膩色迦王が見た「白兎」(大正藏卷五十一 八七九c)・卷六に「蹇兎」(大正藏卷五十一 九〇四a)の語が見え、兎が西域にもいる動物であると認められるだけで、これらの兎に何らかの「恠惶」である特徴——人を驚かせたり害を与えるなども含む——を見出すことはで

きない。『慈恩伝』に見える兎も月兎であり、また『続高僧伝』釈玄奘伝には兎そのものが出現しない。つまり『取経詩話』だけではなく、そのベースとなる玄奘をめぐる初期文献においても、兎が有害であるイメージをもつ要素は確認できない。

さらに視野を漢訳仏典に拡げ、今度は「蛇兎」「蛇虫」「蛇虫」「蛇虺」「蛇虺」「蛇虺」「蛇虫」「蛇虫」「蛇虫」「蛇虫」¹¹と、様々に組み合わせた語で大正蔵データベースを各々検索すると、「蛇兎」「蛇虫」「蛇虫」「蛇虫」¹²「蛇虺」「蛇虫」は見当たらないが、「蛇虺」四例（うち三例は慧琳音義）、「蛇虫」六例（うち一例は慧琳音義）、「蛇虫」二十二例、「蛇虺」七十三例（うち三例は慧琳音義、さらにうち「虎狼蛇虺」が一例、「虎狼蛇虺毒虫」が二例）である。このほか「蛇獸」が三例、「虎狼虫獸」が二例、「虎狼蟲獸」が七例ある。「虺獸」の例は見えない。仮に「蟲」を「蝮」と考えて検索すると、「蛇蝮」は八十一例にものぼり、「師子虎狼蛇蝮」も一例確認でき¹³る。

以上の結果を踏まえれば、第四に見える「虎狼蛇兎」「兎」は兎ではなく「虫」の誤字であろう。

第十の「虎狼虫獸」の「虫」字の方は、漢訳仏典での

用例から「蟲」の俗字「虫（毒虫）」と考えた方がよさそうである。そうであるなら「虎狼蛇兎」の「兎」（すなわち「虫」）も「虫（毒虫）」である可能性が高い。そしてそれは具体的には「蝮」であろう。

五 結語

『大唐西域記』巻一には、薬叉神が変身し、獅子となり蟒蛇猛獸毒虫となり、人を寄せ付けない様子が描かれている¹⁴。さらに『大唐西域記』巻十には、山神が姿をかえて、豺狼になり猿狢になつて旅人を脅かすため僧が居なくなり、寺が荒廃したという話が見える¹⁵。仏典中には神が変化する話は多く、また『菩薩本縁経』（大正蔵巻三）にも菩薩が昔、兎身であつた話も見える。『取経詩話』「虎狼蛇兎」や「虎狼虫獸」も化身である可能性は高い。天竺への長い道程で玄奘一行の心を試すために、化身の姿で現れることもあろう。ただし兎身で飛び出してもせいぜい一瞬驚かせるぐらいで、一行を脅かすほどにはならない。『取経詩話』に見える「虫」「兎」には注意を払う必要がある。

補註

- (1) 太田辰夫は南宋成立説を否定しないものの、原型は五代北宋の頃にほぼ成立していたと推定する。
- (2) 太田辰夫訳・磯部彰解題、汲古書院 平成九年十月。
- (3) 古本小説集成所収『大唐三蔵取経詩話』（上海古籍出版社一九九〇年）附載のテキストを用い、文字の判別が難しい部分は魯迅輯校古籍手稿本（上海古籍出版社一九九一年）も参照した。
- (4) 劉堅・蔣紹愚主編、商務印書館一九九二年。
- (5) 李時人・蔡鏡浩校注、中華書局一九九七年。
- (6) 宋代にはすでに「虎狼」は二文字の熟語として、人間の残忍な性格を示す語として定着しており（「彼虎狼也、見我在子之側、殺我無日矣」（『左伝』哀公六年）、「樊噲曰、臣死且不避、卮酒安足辭。夫秦王有虎狼之心、殺人如不能舉、刑人如恐不勝、天下皆叛之」（『史記』項羽本紀）など）、そのみで受け手（具体的には玄奘）に「怖い」というイメージを抱かせることができる語であるが、本稿では熟語としては採らない。なお、太田訳が「虎狼蛇兎」を「虎・蛇・狼・兎」と訳出し、「虎」と「狼」の間に取えて「蛇」を入れるのは、「虎狼」と熟した言葉（当然そこには派生した意味も含まれる）としては捉えない態度を示したとも考えられる。
- (7) 磯部彰はこの仏心を備えた蛇の話は『大唐西域記』に紹介される如来が化身した蘇摩蛇説話（巻三）を連想させる」と指摘している（底本二一〇頁）。
- (8) 『取経詩話』において「此」一字で指示代名詞として
- (9) 使用される例は多い。
福満正博「中国近世戯曲小説中の異体字研究（四）——『大唐三蔵取経記』——」（明治大学経済学部紀要『人文科学論集』第五十七輯、二〇一一年三月）も同様の見解である。校注本（十二頁の注十）および底本第三章「大唐三蔵取経詩話」の書誌「表I」では「魚」とはみなさない（二二〇頁）。
- (10) 『國家圖書館藏稀見字書四種』所収本（中華書局二〇一五年）二〇一頁。
- (11) SAT2018を利用。
- (12) 「蛇兎」は一例のみ偈の中に見えるが、句が異なるため並列とはいえない。
- (13) 『佛説大摩里支菩薩經』卷四「乃至軍陣器仗刀劍之類、無所傷害。火不能燒、水不能漂。乃至師子虎狼蛇蝎諸毒、皆不能害。」（大正藏卷二十一 二七五c~二七六a）。
- (14) 此藥叉神變現異形、或作師子、或作蟒蛇猛獸毒虫、殊形震怒。以故無人敢得攻發。（大正藏卷五十一 八七四a）
- (15) 自百餘年無復僧侶、而山神易形、或作豺狼、或爲猿狖、驚恐行人。以故空荒、闕無僧衆。（大正藏卷五十一 九三十c）

* 仏典における兎の逸話については、織田頭祐教授に御教示賜った。心から謝意を表したい。

（本学教授）